

# うつぼ物語より(一)

関根慶子

うつぼ物語の中から、童話のヒントになりそうなところを紹介してほしいとの編輯部からの御要望であった。そこで、うつぼ物語俊蔭の巻から、俊蔭の漂流譚と仲忠の孝養譚とを御紹介するが、その中から読者が自由に童話的な素材をとりあげて、想像と独創の翼を延べて、さらに物語を発展創作されるならば面白いことであろう。

うつぼ物語の原文そのものに、素朴な表現やあどけない、またロマンティックな調子をもっている。原文のことばそのものから童話的な息吹を汲みとられることも多いと思うから、原文と口訳とを合せ読まれ、口訳には表わし得ない素朴な面白い味わいを原文からもじかに汲みとっていただきたい。

## 一、俊蔭遣唐使に任じ父母悲しむ。

俊蔭がかたちの清らに才のかしこきこと、さらに譬ふべきかたなし。父母、眼だに二つありと思ふほどに、俊蔭十六才になる年、唐土船いだしたてらる。こ度は殊に才のかしこき人を選びて、大使・副使と召すに、俊蔭召されぬ。父母悲しむことさらに譬ふべきかたなし。一生に一人ある子なり。かたち身の才人にすぐれたり。朝に見て夕のおそなはるほどだに紅の涙を落す

に、はるかなるほどに、あひ見むことの難き道に出で立つ。父母俊蔭、悲しび思ひやるべし。三人の人、額をつどへて、血の涙を落して、出で立ちてつひに船に乗りぬ。

〔口訳〕 俊蔭の容貌が美しく学才のすぐれていることは、全く何にも譬えようがない程である。父母は、人間には眼さえ二つあるのに、この可愛いすばらしいわが子俊蔭は一人しかないのである、と思つている中に、俊蔭が十六才になる年、遣唐使の船が出されることになった。このたびは特に学才のすぐれた人を選んで大使・副使と召したが、俊蔭も召された。遠く別れねばならないので、父母の悲しむことといったら、とてもたとえようもない。父母の一生にたったひとりきりの子なのだ。容貌も才能も人にすぐれている。朝会つて夕方の帰りがおそくなる時さえ、血の涙を流して待つのに、唐土という遠い所に、いつまた会えるかわからない旅路にはるばると出立することになったのである。父母および俊蔭の悲しみはさぞやと想像することが出来る。親子三人の人は額を寄せ合つて血の涙を流して歎き、俊蔭は出立してとうとう唐土行の船に乗った。

## 二、俊蔭波斯国に漂着、梅檀の林で琴を習う。

唐土にいたらむとするほどに、あたる風吹きて、三つある船二つはそこなはれぬ。多くの人沈みぬるなかに、俊蔭が船は波斯国に放たれぬ。その国の渚にうち寄せられて、たよりなく悲しきに涙を流して、「七才より俊蔭が仕うまつる本尊あらはれ給へ」と観音の本誓を念じ奉るに、鳥けだものだに見えぬ渚に、鞍置きたる青き馬出で来て、躍りありきていななく。俊蔭七度伏し拝むに馬走り寄ると思ふほどに、ふと鞍に乗せて飛びに飛びて、清く涼しき林の梅檀の陰に、虎の皮を敷きて三人の人並びて、琴を弾きあそぶ所におろし置きて、馬は消え失せぬ。

俊蔭林のもとに立てり。三人の人間ひて曰く、「彼はなんぞの人ぞ」。俊蔭答ふ、「日本国の王の使、清原の俊蔭なり。ありしやうはかうかう」という時に、三人の人、「あはれ、旅人にこそあなれ。しばし宿さむかし」といひて、並べる木の陰に同じき皮をしきて据ゑつ。俊蔭、もとの国なりし時も心に入れしものは琴なりしを、この三人の人ただ琴のみ弾く。されば添ひゐて習ふに一つの手残さず習ひとりつ。

〔口訳〕 唐土に行こうとする途中で、逆風が吹いて、三つある船の中二つは破損してしまつた。そして多くの人が海に沈んでしまつた中で、俊蔭の乗っていた船は波斯国に漂流した。その国の海岸に船は打寄せられ、俊蔭は頼り所もなく悲しいので涙を流して、「七才の時から俊蔭がお拜みしている本尊様お姿をあらわして下さい」と観音の本願をお祈りすると、鳥けだものさへ見えない海岸に、鞍を置いた青い馬があらわれ出てきて躍り歩いてひんひんといもなく。俊蔭は七度身をかがめて拜むと、その馬が俊蔭の側に走り寄ると思うや否や、ふと彼を鞍の上に乗せてどんどん飛んでいって、清くすがすがしい林の梅檀のかげに、虎の皮を敷いて三人の人が並んで坐つて、琴を弾いて音楽をやつてゐる所に俊蔭をおろし置いて、それから馬は消え失せてしまつた。

馬からおろされた俊蔭は、そのまま林の下に立つてゐた。すると三人の人が問うて言うには、「彼はどういう人か」。俊蔭は答える。「日本国の王の使、清原の俊蔭です。ここまで来たわけはこうこの次第」と言うと、三人の人は「ああ旅人なんだね。しばらく泊めてあげよう」と言つて、並んでゐる梅檀の木のかげに同じ虎の皮を敷いて俊蔭を坐らせた。俊蔭は、もとの日本国にいた時も、心に入れて弾いたものは琴であつたのだが、この三人の人もただ琴ばかりを弾く。それでそこに付添つていて習ううちに、一つの曲も残さずみんな習いおぼえてしまつた。

注 波斯国——今のベルシャあたりと言われている。  
琴——絃楽器の一つで、七絃のもの。

### 三、俊蔭、響きの高い斧の音をたづね行く。

花の露、紅葉の雫をなめてあり経るに、あくる年の春より聞けば、この林より西に木を倒す斧の声はるかに聞ゆ。その時に俊蔭思ふ。程は遙かなるを響きは高し。音高かるべき木かな、と思ひて、琴を弾き文を誦してなほ聞くに、三年この木の声絶えず。年月のゆくままに、おのが弾く琴の聲に響きかよへり。俊蔭思ふやう、ここに四つの隅四つのおもてを見めぐらすに、ここより離れて山見えず、天地一つに見ゆるまでまた世界なきに、琴のねに通へる響きのするはいかなるぞ、この木のあらむ

所たづねて、いかで琴の一つ造るばかり得む、と思ひて、俊蔭、三人の人に暇をこひて、斧の声の聞ゆる方にとき足をいだし、こはき力を励みて、海・河・峰・谷を越えて、その年暮れぬ。またあくる年も暮れぬ。

〔口訳〕 俊蔭は、花の露や紅葉の雫をなめて食としながら過している中に、翌年の春から聞くと、この林から西の方に木を倒す斧の音が遠く聞える。その時に俊蔭は、「距離は遠いが響きは高い。きつと高い音を出す木に違いないな」と思って、琴を弾き詩文を口ずさんでお聞くと、三年間この木の音は絶えない。そして年月のたつにつれて、自分の弾く琴の音に響きを通い合っている。俊蔭が思うには、ここで四方八方を見渡してみると、ここから離れた所に山は見え、天地が一つに見える程に別の世界はないのに、琴の音に通って来る響きのするのはどういふわけだろう。この音の高い木の生えている所をたずねて行って、どうかして琴を一つ造るだけの木を手に入れよう、と思つて、俊蔭は三人の人に暇をもらつて、斧の声の聞える方に、早い速力を出して、強い力を駆り立てて、海や河や峰や谷をこえて行く中に、その年は暮れた。また翌年も暮れた。

#### 四、俊蔭、阿修羅との言う。

三年といふ年の春、大きな峰にのぼりて見めぐらせば、いただき天につきてさかしき山はるかに見ゆ。俊蔭、いさをしき心、早き足をいだして行くに、からくしてその山にいたりて見渡せば、千丈の谷に根をさして、末は雲居につき、枝は隣の国にさせる桐の木を倒して割り、木造る者あり。頭の髪を見れば剣を立てたるが如し。面を見ればほむらをたけるが如し。足手を見れば鋤鉄の如し。眼を見れば金椀かなまわりの如くきらめきて、いみじきおきな姫おきな・翁おきな・子どもうまこ・孫うまこなどあて、頭をつどへて木を切りこなす。俊蔭さだめて知りつ。わが身はこの山にほろぼしい、と思ふものから、いかしき心をなして、阿修羅のなかにまじりぬ。阿修羅大きに驚きて曰く、「汝はなぞの人ぞ。」俊蔭答ふ。「日本国王の使、清原の俊蔭。この山をたづぬること三年になりぬ。今日をもつてなむこの山をたづね得たる」といふ。阿修羅怒れるかたちをいたして、「汝何によりてか。阿修羅の万劫まんげつの罪のなかば過ぐるまで、虎狼蟲けらといへども、人のけちかきあたりに寄せず、山のほとりにかけりくるけだものは阿修羅の食じきとせよとあてられたり。いかに思ひてか人の身を受けて汝がここに來たれる。速かにその由を申せ」と、眼を車の輪のごとく見くる

べかして、牙を劍のごとくひいだして怒る。俊蔭涙をいだして答ふ。「あなかしこ。この山をたづぬること、烈しきいはほ、ほむらいつるまでけだもの烈しきなかを分けいづる時は、炎あつく、劍脛をつらぬき、悪を含める毒蛇に向ひて、もとの国よりこの国にいたりて住みし林よりこの山をたづね、父母が手を別れし日より今日までのことを答ふ。阿修羅、「われら昔犯し罪によりて悪しき身を受けたり。しかあれば忍辱の心を思ふともがらにあらざ。しかはあれども、日本の国に忍辱の父母ありと申すによりて、四十人の子どもかなしく千人の眷族のみなしきによりて、汝が命を許しをはんぬ。汝速かにまかり帰りて阿修羅のために大般若を書きて供養せよ。汝、日本の父母に向ふべきたよりを与へむ」といふ時に、俊蔭伏し拝みて曰く、「日本より山を尋ぬる大いなる心ばへは、父母が愛子として一生に独り子なり。親の願みのあつく、慈悲の深かりしをすてて国王の仰せのかしこかりしによりて渡れり。その父母、紅の涙を流してのたまはく、「汝不孝の子ならば親に長き歎きあらせよ。孝の子ならば浅き思ひの浅きに迎へむ」とのたまひき。さるを俊蔭、あたる風、大いなる波にあひて、多くのともがらほろぼして、一人知らぬ世界にただよひて年久しくなりぬ。しかれば不孝の人なり。この罪をまぬかれむために、たふさるる木のかたはしを賜はりてとしごろ勞せる父母に、琴の声をきかせてその報いとなさむ」といふ。

〔口訳〕三年たった年の春、大きな峰にのぼって辺りを見廻すと、頂上が天までとどいたけわしい山が遠くに見える。俊蔭は勇気を出し、早い足でその方へ行くと、やつのことでの山に着いて見渡せば、非常に深い谷に根をふまえ、先は空に付いて、枝は隣の国にまで延びている桐の木を倒して割り、木材を造っている者がある。頭の髪を見るとまるで劍を立てたようだ。顔を見ると火災が燃えているようである。足や手を見ると鋤や鍬のように見える。眼を見ると金属のお椀のようにきらきらとして、大勢のおばあさん・おじいさん・子ども孫などがいて、頭を寄せて木を切りこなしている。俊蔭は状勢を知り覚悟をきめた。つまり自分の生命はこの山でなくしてしまふのだ、とは思ふものの、勇気を出して阿修羅のなかに入って行った。阿修羅は驚いて言うには、「お前は誰なのか」。俊蔭は答える。「私は日本国王の使、清原の俊蔭です。この山をたづねて三年たちました。そして今日始めてこの山をたづねることが出来ました」という。すると阿修羅は怒った顔をして「お前は何だってここに来たのか。阿修羅の何万年かかっても消えないような深い罪が半分なくなるまでは、たとえ虎・狼・虫けらであっても、人間界に近いものは身辺によせず、この山のあたりに走りくる獣は阿修羅の食物とせよときめられている。どう思つて人間の

身を受けながらお前はここに来たのか。さあ早くその理由を申せ」と眼を車の輪のようにくるくるまわし、牙を劍のようにかみ出して怒る。俊蔭は涙をこぼして答える。「ああ御免なさい。私がこの山をたずねて来ることと云ったら、けはしい巖いははや炎が出るほど獣のはげしい中をわけ出るときは、炎が熱く、劍は脛を刺し貫き悪気を含む毒蛇に向って……」と、もとの国からこの国に来て住んだ林から、この山をたずね、父母の手許を別れた日から今日までのことを答える。阿修羅は、「わしどもは昔犯した罪が深いために、悪い阿修羅の身として生れたのである。だから、わしはお前になさけをかけるようなやからではない。しかしながら、お前は日本の国に忍辱の心をもつ父母がいると申すからして、多くの一家眷族がいとしく思われるので、お前の命を許すときめた。お前は早く故国に帰って阿修羅の為に大般若経を書いて供養してくれ。お前が日本の父母の許に行けるような便宜を与えてやろう」というときに、俊蔭は伏し拜んで言うには、「日本からこの山をたずねる大きな志は並み大ていではなかったのです。実は私は父母の愛子として、彼等の一生にただひとり子なのです。親の思顧が厚く慈悲の心が深かったのをすて、国王の仰せ言のかしこさにここに渡って来たのです。その父母は悲しい血の涙を流しておっしゃるには『お前は不孝の子であるならば、親にいつまでも長い歎きをさせるがいい。しかしもし孝行の子であるならば、親の歎きが浅い間に帰って来て親子会うようにしなさい』とおっしゃいました。それなのにこの俊蔭は、逆風や高浪に出会って、多くの同行の仲間をなくなし、誰ひとり知らない世界に放浪して長い年月を経てしまいました。ですから私は不孝の子なのです。この不孝の罪をまぬかれるために、ここに倒されている木の片はしを頂戴して長年苦勞している父母に琴の音をきかせてそのつぐないとしたのです」と言う。

注 阿修羅——印度の悪鬼の一種で醜怪な面相をしている。

万劫の罪——「万劫」は非常に長い年月をいい、阿修羅は何万年という長い年月かかってつぐのわねばならない罪を持っているので「阿修羅の万劫の罪」という。

辱恥——仏語で、種々の恥辱を蒙っても、決して怒ったり恨んだりしないで、よく忍耐し、心を安住させる修業を言い、なさけのあることにも言う。

(お茶の水女子大学教授)